

# 朝を ひらく

永田 円了  
真国寺住職



時代劇を見ると何か感じるものがある。時代背景は変わっても、日本人の根底に流れるものの考え方に、経済優先の欧米とは何か違ったものを感じる。

新渡戸稲造がドイツに留学中、ベルギーの学者に質問された。「日本には宗教教育がないのに、どうやって道徳教育をやっているのか」。新渡戸はその問いに言葉を失った。日本人の道徳観の源は、と問い続けた結果「武士道」の英文版が生まれたのであった。

どれだけ長く生きるかより、どれだけいざぎよく生きるか。限りある生、その瞬間は二度

## 日本人の道徳観

とない。一服のお茶さえ深く味わう心境。どれもが欧米の文化とは全く異なったものである。

16世紀に日本にきたフランシスコ・ザビエルは、日本社会をみて驚いたという。「日本という国は不思議な国だ。金持ちが威張ってなくて、貧乏人が自分を卑下してもいない」。当時ヨーロッパでは、貧しいということは惨めなことであり、不幸なことと考えられていた。ところ

が日本では、誰もそんなことを思っていない。人々はカネの多少と尊敬の念は関係ないと分かっていた。カネを稼ぐことより、世のため人のために徳を重ねるほうが上だと知っていた。

江戸時代の中期、無私を貫いて政治を動かした日本人がいた。貧しい宿場町の行く末を憂える商人・穀田屋十三郎である。自らの破産も一家離散も辞さない覚悟で、同志と共に千両の基金を調達し、それを殿様に貸し付け、その利息で吉岡宿を蘇生させた感動の物語である。歴史学者・磯田道史さんがこの実話を古文書から読み解き、現代によみがえらせた記録が「無私の日本人」(文芸春秋)であ

る。注目すべきは、無名の普通の江戸人が、この奇跡を起こしたということである。

明治の政治主導による資本主義が形を成したのは、役人たちが汚職をしなかったからである。彼らは痛々しいほどに清潔だった(司馬遼太郎「この国のかたち」)。この高い道徳観は、いったいどこから生まれたのか。

いま世界を席巻しつつある自国ファーストの考え方、日本にとって怖いのは、隣より貧しくなることではない。本場に怖いのは、本来日本人がもっている「清く美しく生きる」道徳観が失われることである。地球上のどこよりも、落とした財布がきちんと戻ってくるこの国。小さなことのように思えるが、こういうことがGDPの競争より大切なことではないか。

# 清く美しく生きる